バロ タコ！！
ー 元気でね！！ ー

ACEF 49th Study Tour in Bangladesh

2015.8.5－8.19

目次

☆ バングラデシュ紹介　2ページ
☆ ベンガル語紹介　3ページ
☆ ACEF・BDPの紹介　4ページ
☆ 学校のある地区・地図　6ページ
☆ スタッフ紹介　7ページ
☆ 各メンバー紹介　9ページ
☆ プーバイル地区活動報告 前半　15ページ
☆ 各チーム地区報告　Aチーム（ネトロコナ地区）　Bチーム（ジャマルプール地区）　Cチーム（ボリシャール地区）　16ページ
☆ 宿舎・食べ物　28ページ
☆ プーバイル地区活動報告 後半　30ページ
☆ 参加者名簿　32ページ
☆ 日程表　33ページ
☆ 感想文　34ページ
☆ 編集後記　56ページ

バングラデシュの紹介

正式名称 → バングラデシュ人民共和国

首都 → ダッカ

面積 → 14万4000km²

人口 → 1億5,250万人

通貨 → タカ

言語 → ベンガル語

宗教 → イスラム教

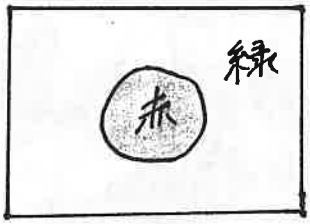
☆1971年 パキスタンから独立！

"バングラデシュ"はベンガル語で…"ベンガル人の国"

① ② ① ②

日本語での漢字の表記は中国の表記をそのまま用いて

『孟加拉』



バングラデシュの国期

赤…昇る太陽

緑…豊かな大地

『豊かな自然を表す緑の地に独立のために流した血を示す赤い丸という説もある』

※初代バングラデシュ大統領ムジブル・ラフマンの娘のシェイク・ハシナ首相は「父は日本の日の丸を参考にした。」と証言している。

かんたん！ベンガル語講座

-ベンガリィ-	-ジャパニ-
◎ আসসালামু আলাইকুম アッサラーム アライクム	ムスリムの方との あいさつ
◎ ওয়া আলাইকুম আসসালাম ワアライクム アッサラーム	↑の返し方
◎ নমস্কার ノモシュカル	ムスリム以外 の宗教の方との あいさつ
◎ ভাল আছেন ? バロ アチェン ?	元気ですか？ (目上の方に)
◎ ভাল আছি バロ アチ	元気です。
◎ আপনার নাম কি ? アプナール ナーム キー	あなたのお名前は何ですか？
◎ তোমার নাম কি ? トマール ナーム キー ?	君のお名前は？ (子供や友だちに)
◎ আমার নাম 「 」 アマール ナーム	私のお名前は「 」です。
◎ অসুবিধা নাই オシュビダ ナイ	問題ない
◎ ধন্যবাদ ドニャバッド	ありがとう
◎ সুন্দর シュンドール	すばらしい！
◎ হাসি দাও ハシ ダオ	笑って ☺
◎ আবার দেখা হবে アバール デカ ホベ	また会いましょう!!

アジアキリスト教教育基金

(The Asia Christian Education Fund)

ACEF とは

バングラデシュで一番必要な事は初等教育だと考え、BDP を創立したミナ・マラカール女史の呼びかけに応え、1990 年 10 月に ACEF を発足しました。また、ACEF は、学校に行けず、田んぼや畑で働いていたり、街で物売りをしていたりする子どもたちが、働きながら通える寺子屋を開いて、一人でも多くの子どもたちに教育の機会を与えること。アジアの諸問題に、積極的に取り組む青年を育成すること。を願って年二回のスタディーツアーや ACEF セミナーなどの活動をしています。

この ACEF のロゴマークは寺子屋を A.C.E.F で表しています。子どもたちが教室で勉強をしているところです。

BDP

(BASIC DEVELOPMENT PARTNERS)

1971年　バングラデシュが独立。当時アジア最貧国といわれていた。同国における識字率は、約30%であり、特に女子に対する教育は軽視されがちでした。農村など貧しい地域においては、女子は14～15歳で口減らしのために嫁がされ、それが世界一の人口密度かつ人口増加率の一因ともなっていました。長い間、女医として地域医療に従事してきたDr.ミナ・マラカール女史は、保健、衛生教育その他すべての地域活動の根底に「基礎初等教育」がなければならないことを痛感し、「すべての子どもに読み書きを」を念頭に、1990年5月、ダッカ市南部ジュライン（スラム地域）において寺子屋運動を開始し、それを、「サンフラワー教育計画＝Sunflower Education Project ＝ S.E.P.」と名づけました。家庭が貧しく、中学校に進めない女子学生に奨学金を与え、先生となってもらい、小学校入学前の子どもを集めて「寺子屋幼稚園」を始めたのです。

なぜ、小学生から始めなかったのかというと、その地域の方々（農村でも同様ですが）は、子どもたちに教育を受けさせる必要が分からなかったからです。幼稚園の子どもたちに字を教え、算数を教えることによって「教育」の重要なことを父母に知ってもらうことがまず必要だったのです。

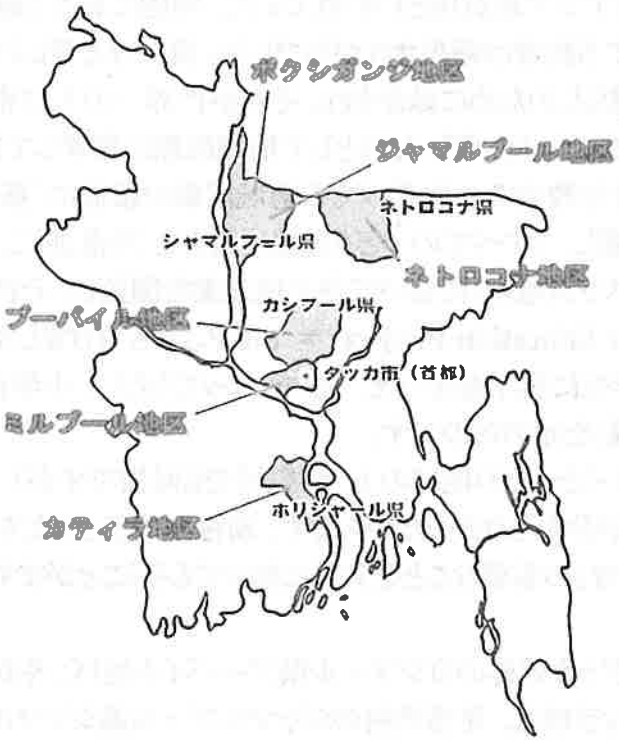
この運動は、みるみる拡大し、翌年にはダッカ郊外のガジプール県プーバイル地区、やがて、南部農村地帯のボリシャール県カティラ地区、北部農村のジャマルプール県ジャマルプール地区、ボクシガンジ地区、ネトロコナ県ネトロコナ地区にまで広がっていきました。

それから約10年を経過し、1999年6月、SEPは、政府からNGOとして正式の認可を受けました。この新たな出発にあたり名称を新たにSEPからBDP（Basic Development Partners）に変更しました。

B.D.Pをそれぞれ花びらに見立てて、

構成されたBDPのロゴマーク。

BDP
スクール・マップ



ボクシガンジ地区　：10校

ジャマルプール地区：17校

ネトロコナ地区　　：7校

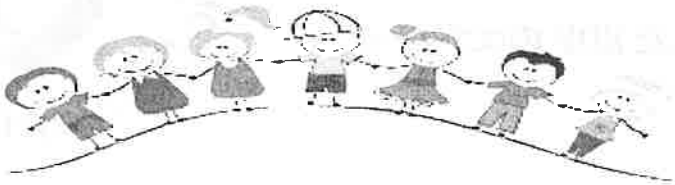
プーバイル地区　　：10校

ミルプール地区　　：4校

カティラ地区　　：19校

― 生徒の数 ―

ボクシガンジ地区　：幼児クラス－393人　小学生－883人　職業訓練校生－34人
ジャマルプール地区：幼児クラス－918人　小学生－2307人
ネトロコナ地区　　：幼児クラス－334人　小学生－1070人
プーバイル地区　　：幼児クラス－369人　小学生－1318人　職業訓練校生－78人
ミルプール地区　　：幼児クラス－223人　小学生－978人　職業訓練校生－30人
カティラ地区　　：幼児クラス－720人　小学生－935人



スタッフ紹介

職業訓練校講師プロカシュさん、アイリーンさんなどがプーバイルオフィスにいます。

ダッカ＆プーバイルオフィス

BDP最高責任者のアルバートさん メンバーとお話しすることが大好き！どこまでも突っ込んでくるのでこっちがタジタジになることもしばしば

子煩悩なプーバイルオフィスの責任者・オモルさん メンバー・スタッフを温かく見守っていることが多い

双子の父・ラハジさん 赤ちゃんの泣き真似が上手く、面白い

千原せいじそっくりのロチョンさん 高校生に連れまわされるスタッフを見て笑っている

経理のソンチョイさん、総務のアムブロスさんなどがダッカオフィスにいます。

Aチーム（ネトロコナ）

強面だけれども面白いハビブさん 写真の写りをとっても気にする方で必ずと言っていいほど2度撮りを要求する。神経衰弱が強い

毎日家族サービスを行うアブールさんはとても優しくて、笑顔が素敵 犬を追い払う時の反射神経と勢いは見もの

歌をこよなく愛するヘモントさんの口癖は「問題ない（オシュビタナイ）」 とにかく釣りが大好き∞ 日本語も少し話せる

目つきが悪い、もとい目力の強いヤシンさんは結構テレビっ子 無口なのにトランプゲームで勝つと「俺が1番！」と主張し続ける

Bチーム（ジャマルプール）

No music, No life. 音楽狂のディコさん いつも色んな話をして、ジョークで笑わせてくれる

フレンドリーで親切なモクレスさん 川遊びで足を洗ってくれたり、歌うときは太鼓をたたいてくれる

身の周りの世話をやいてくれるモタレフさん カエル退治は任せなさい！

いたずら大好きなドライバー・ステファンさん 歌と踊りが大好きで茶目っ気たっぷり

歌が上手なバゼットさんは移動中の車内でもいっぱい歌を披露してくれる♪ 時には日本語の歌も歌う

いつも挨拶をしてくれる優しいホビさん

Cチーム（ボリシャール）

人間観察が得意なファルークさん
1つのことを語り合い始めたらどこまでも奥深くなる

牧師の資格を持つダニエルさん
愛妻家で近所の人からも慕われている

娘にメロメロのジョンさん
ボートをわざとゆらして怒られてもとっても笑顔

みんな大好きドライバーのニキルさん
人の幸せは自分の幸せで性格までも素敵

「皆サン、オ元気デスカ？」が口癖のビップルさん
校長先生をしている奥さんとラブラブ

サニー大好きモンクシさん
メンバーやスタッフの面倒までみる縁の下の力持ち

Special Thanks

アナロールさんのご家族
可愛らしい奥様のミナさん
天真爛漫！娘のアプローシャ
通称リトルモンスター息子のナビン

青年海外協力隊員（右から）
Disneyのアリエルが大好き、ゆきさん
理科と音楽の教員免許を持つ、みおりさん
サロワカが良く似合う浜っ子のミッキーさん

ネトロコナで料理を用意してくださったクックさんたち 汗が噴き出る蒸し暑い中、毎日、日本人の口に合うご飯をつくってくれました。（もちろんプーバイル、ジャマルプール、ボリシャールそれぞれにもいた）

寝起きの運転が荒いレンタルドライバー・デュラルさん

Cチームのメンバーにメイクやメンディーをほどこしてくれた、村の女の子たち

2週間、お世話になりました。ドンノバーット！

…Netrokona…

荒谷 性…

Aチームのチームリーダー
ずっと通訳 頼んでしまってすいませんx
静かに皆を見守ってくれました。
色んなお話聞けて楽しかったです☆
ヘモニト情報入手ありがとう
ございました心

…めーさん

将来はドクター?? 大学生
スタッフの皆さんにドクターと呼ばれて
いました。 今日一の笑いの中心
はこの人でまちがいない!!!
第一印象とちがう…? あれ…??
けん玉おみごとでした。

ぼん…

スタッフ愛は誰にも負けない!
クオリティの高すぎる変顔のまわりは
いつもにぎやか Aチームのお父さん
的存在!? 自称 頼れるBOY!!
年齢詐称のうわさが…

けいてい…

元気いっぱいすぎる高校生
ピンクのカチューシャは必須!!!
いつでもテンション高めのcrazy girl∞
しかも100%ではないらしい…⚠
食べた後はとりあえずねてました。

…ろいーちゃん

Aチームのカメラマン高校生。
良い写真沢山ありがとうございます!!
朝にめっさ強く、今日はうちの方が!と思って外出たり もういる☀
冷静さはチーム🅰
トランプパワー楽しかったね♡🌸◇🌸

たまちゃん…

第二のcrazy 高校生
じわってくる笑いを提供してくる!! 笑
ベニガリィにモテモテ♡ 電話番号聞かれまくってました。うん、だまってうごかなきゃかわいい♡ 内等におどろく声はおっさん。

…ぼんどっ

常にねている高校生
気付いたらねてる。基本ねてる zz
起きたらすぐ男の子たちにかりまれる。
子どもたちがいつも「しんじ〜」って呼んでました。人気者〜
笑いのツボが一番浅い!!
「ぼんどっ」は「友だち」の意味.

…Ateam…

B team in ジャマルプール

Kyouko

ACEFのスタッフさん.
きょうこさんの人生アドバイス
説得ありすぎておもしろかった笑.
うるさい私たちをまとめてくれて
本当お母さんみたいな人

Bチームのカメラマン!
カメラを手にしたかいそうさん
本当にただの戦場カメラマン笑
身長高くて、一見普通の人だけど
変な所で意地悪な人.

Kaisou

Yuko

通称ぬでし.
普段、学校の先生をしているはずなのに.
はめを外してしまう、
若い面を見せることが多々あり.
自分を忘れないでね.

Yuki

テンションの使い分けが上手なラッシー。途中でフィーバーして病院送りに…しっかりしてるのかしてないのかwww…大人な大学生です。

Kouichi

笑い声が特徴的なこうくん。
やるときはやるし、病人をいたわってくれる優しい所もあるけど、人で遊ぶ傾向が強い。
ターゲットにならないように気をつけて。

Noemi

マイペースでクモが嫌いなのえみ。
自由な子だけど、バングラデシュのことを一生懸命考えていて、やるときはやってくれる奥はすごくいい人。
あと、絵を描くのがうまい。

Marika

いつも、歌っているか大声で騒いでいるか、とにかく元気で明るいまりか。でも、小川(Cチームの人)といると、静かでしっかり者。
フルート吹くのがうまい。

went to Barisal

儀子さん（井上 儀子）
優しくて可愛い、頼れるＣチームのお母さん
温かい目で見守り、時にはあえて手を貸さない。
マリア様のような愛情をたっぷり注いでくれました♡
不平不満、怒りや悲しみも全てを笑いに変える天才であり
最後の最後までダジャレを口にしていました。
「ジュートがじゅーと続いているでしょ？」は名言。

みっちー（豊岡 美智子）
儀子さんに代わってチームをまとめる、お姉さんのような存在。儀子さんからの信頼もナンバー1
看護大学出身・元青年海外協力隊志望というバックグラウンドがあり、時事に詳しい
バングラデシュで感じ得たことを経験だけでなく、日本や世界の事柄に関連付けるシェアリングはメンバーの刺激になったはず

サニー（木村 彩）
Ｃチームの切り込み隊長
元気いっぱい、眩しい笑顔はまさしく太陽のサニー☀
オロナを着け忘れることが多く、見た目もあって男の子に間違われていることも
5人を乗せたリキシャを漕いだり、大盛のご飯をペロリと平らげる姿は間違いなく男の子
ツアー中に20歳の誕生日を迎えました！

おっちー（越智 遥）
派手な見た目に反してとても真面目で努力家。
責任感が強く、「本能寺の変」の振り付けを現地で考え、見事踊りきってくれました
メンバーに引っ張られていることが多いけれど、自分の考えははっきり述べる
サロワカを着ているとき、ダンスをしているとき、炭酸飲料を飲んでいるときが幸せ♡

りさ（網野 理彩）
空いた時間を常に子どもたちと過ごしており、男女問わず大人気！
帰舎すると真っ先に子どもたちから名前を呼ばれるため、十分な昼寝が出来ないこともしばしば。
ダンス部に見劣りしないキレキレのダンスに、全員が釘付けになりました♪

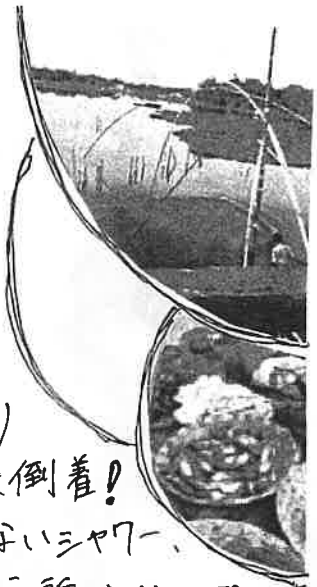
みく（飯塚 未久）
Cチームで唯一体調を崩さなかった健康優良児
子どもが大好きで、気が付くと子どもたちといる。いないと思うと子どもたちに連れ出されていたりする
優しく素直な性格で、一緒にいると穏やかな気持ちになれるためか、子どもたち(特に女の子)から慕われていました♪

ゆり（小川ゆり）
大学生２人が幼く見えるほど落ち着きを払っているけれど、チーム・ツアーメンバー共に最年少の高校１年生
ぼ～っとしているようで着眼点が鋭く、シェアリングでは思わず押し黙ってしまうような発言をする
他人には理解不可能な、ゆり的「カワイイもの」に出会うと年相応にはしゃぐ☆ミ

PUBAIL プーバイル

8がつ5にち

- 羽田出発
- ダッカ倒着
- 宿舎へ移動



宿舎に向かっているとき、あちこちでクラクションが鳴っていたり、車の中にお金を求めてくる子どもや道端にある大量のゴミ、日本とのちがいにびっくりそんな衝撃を受け、宿舎に倒着！

水のないトイレ、水しか出ないシャワー、まだまだ日本とはちがう所は、いっぱいある。これからの生活が楽しみ♪

8がつ6にち

- オリエンテーション
- 市場へ買い物

午前中は、BDPのスタッフさんがバングラデシュの説明をしてくれました。初めて知るバングラデシュの姿がタタく、いろんなことを学びました。

午後は、市場に行ってお買い物！ヤギの頭が店頭に並んでいたり、魚をさばきながら売っていたり、新しい発見がたくさんありました。そして、サロワカミューズ！サロワカにもトレンドがあって、今年は長めが流りみたい。かわいかったなぁ～♪

NETROKONA A team

Aug. 7

道路がキレイに補装されていて予定よりも早くネトロコナに到着!!!
スタッフさんのお子さんのアプロージャとナビンが『ジャパニ。ジャパニ。』と言って笑顔で私たちを迎え入れてくれた。宿舎の前に集まってくれた子どもたちと手つなぎ鬼

Aug. 8

宿舎から20分程歩いてBDPスクールへ
50人くらいの子どもたちが歓迎してくれた♡ 子どもたちの歌やダンスはとても上手☺
人懐っこい子どもたちに、みんなキュンキュンでした♡
バングラデシュの遊びも教えてくれた♡

Aug. 9

ボートで川を渡たり
BDPスクールへ
"将来の夢は〜?"ときくと

みんなで記念撮影

"doctor""teacher"など
夢を持っている子どもたち
がたくさんいた!
私たちはビリーブとふるさとを
うたった。子どもたちのキラキラ
した目が、かわいかった✧

Aug. 10

学校訪問は
リキシャで♡リキシャの
語源は日本の「人力車」!
学校に着いたら…なんと私たちは
子どもたちの授業に参加できました〜〜
英語の授業をがんばっていました♡♡
幼い子どものクラスもありました♡

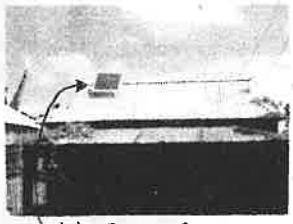
8/11

ボートの上

午前中にボートに乗って2つ学校に行きました。1つめの学校の屋根にソーラー☀パネルがありました。それでも、教室の中は少し暗かったです。

(BDPスクールの先生と生徒と。)

2つ目の学校は、トタンの学校で、中には、机とイスがなく、床の上に座って勉強をしていました。



ソーラーパネル

みんな一生懸命勉強していました。

見送りに来てくれた子供達

ばい～!!(バイバイ)

学校に行く途中には、鉄をたたいて、伸ばして物を作っている人や川で網で魚を捕っている人などを見れて、ネトロコナの人々の生活を少し知れました。

エク、ドゥイ、ティン!

BDPスクールの先生と生徒たちと

8/12

力車で学校に行きました。ガタガタ道は、乗っているのがとっても大変でした…

学校の入口は、花🌸や草で、きれいに飾られていました。

学校に着くと、子供達が近くに来て、花の花びらと、花粉をかけてくれました。

日本の事や、バングラデシュの事についてお互い質問をしました。今回は、特に、ご飯のことについて、話をしました。

先生

BDPスクールの先生&生徒のみんなで、歌を歌ってくれました。手を上に伸ばして、大きい声で歌っていました。

午後は近くのマーケットに行ったり、子供と遊んだり、お散歩に行ったりしました。マーケットには、お米、魚、飲み物、野菜、お菓子、果物…など、生活に必要なものが沢山売られていました。又、服を作るところや、髪を切るところもありました。

遊びに来てくれた子供たちと

洗濯物を干すヒモで縄飛び

シャボン玉～

8/13 活動最終日…

今日は、宿舎から、一番近くにある、BDPスクールに行きました。いつも遊びに来てくれる子供達が、勉強をしている姿を見ることができました。

(BDPスクールのみんなと。smile…)

(かわいいダンサー)

先生の質問に大きい声で答えているのが印象的でした。

先生たち…

今までは、試験をしていたので、授業に参加することは、できませんでしたが、今回は、それぞれの教室に分かれて授業に参加できました。

(メンディ)

午後は、スクールの先生方が、ケリーを着せてくれました。手と足には、メンディで、絵を書いてもらいました。

(授業…真剣に受けてます!)

(モジャモジャ)

(last dinner)

最後の夜ご飯は、特別豪華で、ご飯(お米)も、きゅうりも、お肉も、揚げ物も、果物も、とっても美味しかったです!!

そして…

最後の夜も、いつもの通り、トランプ♠♥♣♦をしました。

(ヘモントさん毎日手伝りしてました)

(ヤシンさん)

(ルビブさん)

8/14

1週間、本当に楽しく、すばらしい体験が出来ました!

ネロコナは、すごく良い場所で、沢山思い出が作れました。

最後に、ルビブさんとヤシンさんに、みんなで書いたメッセージを、スタックさんの子供&クックさんに、もプレゼントを渡しました。

本当に、ドンノバット! Thank you!! ダダ〜!

(クックさん)

(タナロルさん)

(ナビン)

(タブジャ)(ミナさん)

Jamalpur & B team

8/7

Pubail → Jamalpur

今日は、午前中にプバイルの宿舎を出発してジャマルプルの宿舎に向かいました！
着いた後は、ランチして、みんなでゆっくりしました！
途中停電してパーティも
ろくうそ遊んだ♪
停電も意外と楽しい♪
スタッフさんの優しさが身にしみる日々です♡

8/8

First School visit♡

午前中は
車とリキシャバンに乗って、
JADHU MOLLAH school
に行ってきました！
フルーツをたくさん
だしてくれて、美味しかった！
子どもたちと遊んだあとは、
マンゴーとパパイヤの木を
植えさせてもらいました！
お昼を頂いて、お昼寝を
したあと、小学校の先生のお宅を
訪問しました！
ここでもたくさんのフルーツを頂きました♡

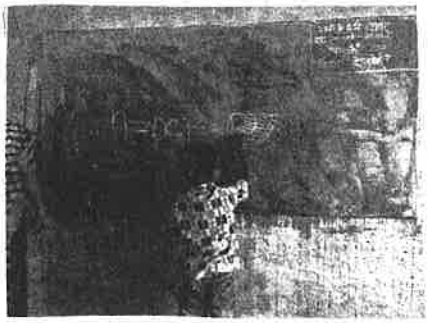
今日は1日ボクシガンジに
居ました。ボクシガンジは、ジャマールより少し北に位置するところです。
午前中は教会に出席しました。
ここでは、チャーでは、なんとコーヒーを頂きました!
その後は、BDP office に訪問できた
Vocational school を見せてもらいました!
その後は office でランチを頂いた♡ ボクシガンジ day
ジャマールとは、一味違うけどもどっちも美味しい

8/9

8/10

4th day in Jamalpur

午前中は小学校を訪問しました!
校庭で遊ぶ30時間が長くて、子どもたちとたくさん遊べました♡
午後は、先生のお宅を2軒訪問させてもらいました。
フルーツを食べおざて、みんなお腹一杯笑。
一軒目はおじとごうかなお家でした!(5種類のフルーツを頂いた♡)
2軒目は親戚一同で大きな土地に住んでいておじく楽しそうでした!
きっと昔の日本もこうだったのかなー、って感じました。



8/11

・学校訪問
・ボートトリップ

今日は、学校訪問と、ボートトリップをしました。
午前中の学校訪問は、トタンでできている学校（隣のクラスの音が聞こえてきてうるさい）を訪問しました。
決して良いとは言えない環境でも、必死に、一生懸命に、勉強をしている子どもたちの姿は、私たちの心の中の何かに触れた気がしました。
午後はスタッフさんにボートトリップに連れていってもらい、言葉では言い表せない、とてもキレイな夕陽を見せて
きっとみんなの良い思い出になったと思います。もらいました☆

・病院
・中華料理店
・美術館

8/12

今日は、うっしーが熱を出したので、大学の病院に行きました。大学の教授に看てもらい、最初は不安だったけど、親切で安心して診察を受けることができました。うっしーのおかげでもあって、その後予定にはない中華料理店に行きました。
私達の食べた中華料理は日本と同じような感じで久々の中華料理は新鮮で本当に美味しかったです。そして、BDPのスタッフさんのディコさんが美術館に連れてってくれました。バングラデシュの独立の形が絵で伝わってきて衝撃を受けたけど、とても勉強になりました。

・学校訪問
・メンディー & サリー試着

8/13

今日は学校訪問を2つ、メンディーとサリーの試着をしました。1つ目の学校訪問は、今まで訪問した学校の中でもきれいな服を着た子どもたちが多く、歌やダンスも動きが細かったりしてまた違う雰囲気で新鮮でした。メンディは専用のペンで手に絵を描くというもので、現地の人に描いてもらいました。細かい所までスムーズに描いていて、すごいなと思いました。サリーは向こうの人の服で、普段着とパーティー用があって、思った以上に動きずらくて、これを毎日着て作業をしているのかなと思うと、やっぱりすごいなと感じました。

Thank you!
Gamo!

地区報告（Cチーム）

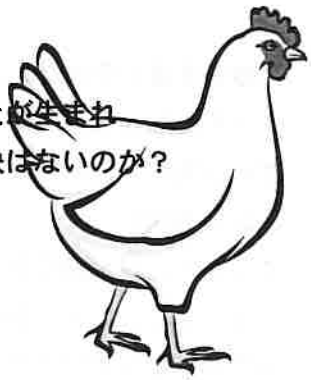
Date	Time	Activities	
8/7	9:00	プーバイル出発	→途中 40 分ほどフェリーに乗る
	17:00	カティラ到着	
	20:00	シェアリング	
8/8	10:00	小学校訪問①	
	17:00	家庭訪問①	近所に住む一家を訪問
	20:00	シェアリング	
8/9	8:00	礼拝	→徒歩 10 分の教会へ行く
	14:00	高校訪問	
	17:00	ボートトリップ	
		ガロ族訪問	→ガチョウを 2 羽いただく
	21:00	シェアリング	
8/10	10:00	小学校訪問②	
	18:30	家庭訪問②	→子どもたちの家を訪問
	21:00	シェアリング	
8/11	10:00	小学校訪問③	
	16:00	サリーの着付け	→メンディー、メイクをしてもらう
		カバディ観戦	
	21:15	シェアリング	
8/12	10:00	小学校訪問④	
		家庭訪問③	→ダニエルさん宅訪問、パン体験
	17:00	カルチャーショー	
		家庭訪問④	→JOCV ホームステイ先訪問
	20:00	シェアリング	
8/13	10:00	小学校訪問⑤	
		地域新聞社訪問	
	17:00	ショッピング	→近所のバザールでお買いもの
	20:00	シェアリング	
8/14	7:45	カティラ出発	
	14:30	独立記念塔見学	→ダッカの中華料理店で昼食
	17:00	プーバイル到着	
	19:15	シェアリング	

◎2 羽のガチョウ

バングラデシュで生活をする少数民族・ガロ族を訪問した際、2 羽のガチョウを食糧として譲ってもらい次の日の昼食にいただいた。
Z
ガチョウが恐怖に怯え、脱糞する姿
首を落とされ、羽毛を剥ぎ取られる姿
2 羽のガチョウが「生き物（命あるもの）」から「食べ物」へ変わる過程を目の当たりにして、「命をいただいて生きている」という現実をつきつけられたように感じた。

平然と口にしているお肉も、もとは感情を持つ生き物であり、
私たちの前に食事が運ばれるまでに、多くの人の手を介している。
これらのことを知識として心得ていたけれども、身を持って実感するのは初めてだった。

ガチョウの最期を見送り、その顛末を見届けたことで食事に対する感謝が生まれた。
メンバーの中には「いただきます」と「ごちそうさま」はクックだけに向けた言葉ではなく、生きる糧となった動物やそれらを育て、裁く人にも向けた感謝の言葉であると言っていた。

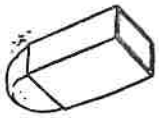


どういう形であれ自分自身が食べ物を粗末にしないという決意とが生まれ
日本において食べ物がどんどん捨てられていくという問題を解決はないのか？
自身の食環境について考えさせられる出来事であった。

◎教育ってなんだ？

ボリシャールでの 1 週間の中で、様々な形で誰もが 1 度ぶち当たり、シェアリングでも大きなテーマとなった。

体と自然を使って地域で生活と直結する仕事をする大人の姿
ドロップアウトをしても大人の手伝いをして楽しく遊ぶ子どもの姿
これらを見て、教育は大切だけれどもバングラデシュの人々は必要としていないのではないか？という困惑する者



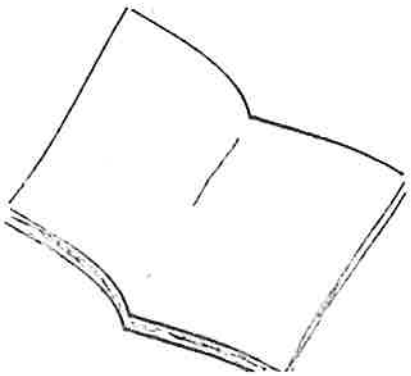
子どもたちの間に「年上の子どもたちが年下の子どもの躾ける（世話をやく）、年下の子どもたちは年上の子どものその後を追う」という関係を見出した。
JOCV のオリエンテーションで、「教育の第一歩は躾である」という話を聞いたこともあり、子どもたちの間で自然に躾が行われているのであれば学校に行く必要はないのではないか？と考える者

家庭訪問を通して雨風もしのげない何もない家庭と、外装にも手がかかった電化製品が並ぶ家庭から同じ地域での貧富の差を目の当たりにした。
誰が悪いわけでもないけれどなぜこの差は生まれてしまうのか、この差を埋めるための教育なのに意味をなしてないと思い感じる者もいた

儀子さんは読み書きを習い、署名が出来ることで月給を得られる（日雇いに依存しない）ことを教えてくれた
ファルークさんは奨学金制度を知らず優秀な生徒でも貧しさからドロップアウトをするという話から、教育は自分たちの生活を安全に便利にするための「ツール」を自分で取捨選択する手段や基準を学ぶことだと示唆した

人権を主張し守るためにも「教育は必要である」とそれぞれの形で結論づいた。
子どもたちが家庭の経済状況や楽しくないという理由で学校に通わないということを防ぐ役割が NGO スクール（ＢＤＰスクール）にあると感じた。
しかし NGO スクールは運営も厳しい。子どもたちが学校に通いたくなるような工夫をこらすことが役割にあるけれど、現場の先生たちの雇用の安定性も大切である。
では、日本として・個人としてそれぞれ私たちはどのようなことを考えていったら、行っていったらよいのだろうか？

１つの問いに自分の意見を述べたら、また新たな問いが現れる。
答えのでないものばかりで、相反していることがループを続けいかに自分が無知で無力であるかを思い知らされた出来事であった。



◎将来の夢

目をキラキラ輝かせた子どもにする質問といったらコレ！
仲良しの２人に聞いてみました。

将来、何になりたいの？

儀子さん

ポリスになりたい！
こいつ（少年 B）が泥棒になるから逮捕する！

少年 A

僕がポリスになるから
泥棒はおまえ（少年 A）だ！

少年 B

仲がよろしいことで（笑）

◎親父ギャグ

儀子さんの特技は親父ギャグ！
２週間の中でも~~全員をがっかりさせた~~渾身のギャグがこちら↓

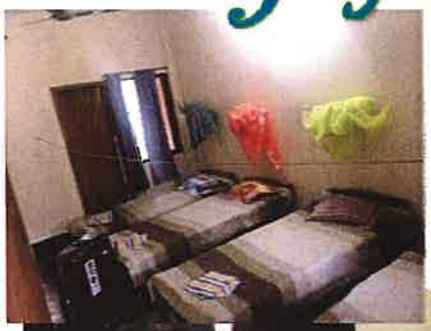
バングラデシュの 1 番の思い出といったら、足がかゆいっていうのが C チームみんなのおもいだと思う

みっちー

あっ！Cチーム！
（＝足チーム）

儀子さん

Diary of Bangladesh



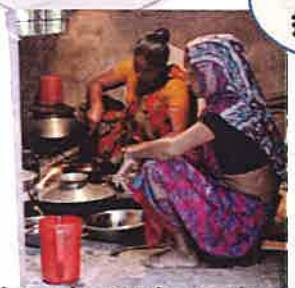
＜宿舎＞

泊まった事務所の一室！ファンが回ってるから夜でも暑くない。上に蚊帳をかけて虫よけ対策もバッチリ！！
トイレは和式の逆みたいな感じで自分で水を汲んで流します。お風呂はシャワーか井戸から汲んで来て水浴び。冷たくて、暑いのも忘れちゃうくらい気持ちいい！！！

カレー&
揚げ物

＜食事＞

朝食に良く出たのは「ルティ」という薄く焼いたナンのような料理。野菜カレーをのせて食べます。三食カレーですが種類は色々！パパイアと野菜のカレー、牛肉カレー、魚カレー、、などなど。野菜の揚げ物や、ゆで卵、デザートにはパイナップル、マンゴー、バナナ！「ジャックフルーツ」という現地ではポピュラーなフルーツも。他にも様々な料理があって毎日カレーでも飽きません！！ 「チャー」というベンガルティーも毎日頂きました。甘くてとってもおいしい❤



バングラの台所はすべて座って行うため、とても暑くて体も痛くなる、、 それでも毎日作ってくれたクックさんたち。ドンノバット！！！！

＜伝統衣装＞

バングラの普段着サロワカミューズ。体のラインを出さないよう「オロナ」というストールを巻きます。オロナは一番大事！ 既婚女性が着る「サリー」も体験できさせていただきました。一枚の布を巻く技術がすごい！！

サロワカミューズ（右）
& サリー（左）

＜メンディ＞

バングラデシュ、インド等の伝統的なボディーアート。ヘナタトゥーとして日本でも注目を浴びている。手や足に花や植物の絵を学校の先生方に書いていただきました。

リキシャ

＜街の様子＞

都心の方はとってもにぎやかで人口密度が高く、道路は混みこみ！車、バス、リキシャ、バイク、人が交通ルールも関係なしに突っ走る。事故が起きないかヒヤヒヤ！？　道路は殆どがレンガでできているため道がボコボコ。石のないバングラではレンガの需要が高く、あちこちでレンガを見かけます。

売店もよく見かけます。辛いスナック菓子から甘いクッキーやチョコなど盛りだくさん❤いっぱいありすぎてどれを買うか迷います ^^

飲み物もコーラやセブン・アップなど日本でも見る炭酸が。

＜乗り物＞

良く見るのはやはり「リキシャ」日本の人力車をまねているため椅子が少し斜めっている ww　体力を使います。

地方では船にも乗りました。小さいボートから大きなエンジン付きの船まで。屋根に乗って風に当たるととても気持ちがいい！！

学校の井戸

＜農村の生活＞

農村に行くと右も左も見渡す限り田んぼや畑！子どもが働く姿も見えました。機会は少なく朝早くから牛にひかせて耕す姿も。そういった土地は地主一人の土地で働いている小作人は日雇いだそうです、、、

BDP の事務所や学校などに良く見られる井戸。生活に欠かせないものです。BDP の井戸は安全性が高いため地元の人たちは使うことが多いそうです。洗濯や皿洗い、水浴びまで井戸ではなく川で行うのも当たり前。全部いっしょくたんです。

働く人たちの姿を見るとみんな頭に重そうな荷物を載せて運んでいました。首が疲れそう、、、

PUBAIL

8/14

それぞれの地区から
プーバイルに帰ってきました。
B & A チームは途中で
マイメイシンにあるテゼ
共同体に寄って 礼拝に
参加させていただきました。
静かで心休まるすてきな所
でした！ プーバイルで昼食を
すませると、子どもたちが遊びに！
その笑顔に長旅のつかれも
忘れられました♡

テゼ共同体

プーバイルの子どもたち♡

BDPスクールの卒業生

8/15

午前中はBDPスクールの卒業生の
方々のお話を聞けました。貴重
なお話やBDPに対する思い
などたくさん聞けました。

フリータイムは子どもたちから遊びを教えって遊んだり
トランプをしたり♡

午後は近くのZOOで遊びました!! ZOO？
公園？ スタッフさん とメンバー
全員で500円位らしいです。
帰り道の景色もキレイ

ZOO

教会訪問

8/16 朝食後、近くの教会に礼拝へ。
礼拝後にスタッフのアンジェラさんの赤ちゃんの洗練式に立ち合わせていただきました。

その後、BDPの職業訓練校を訪問。コンピュータ、メカニック電気の3つのクラスの授業を見学。たくさん質問できました。

職業訓練校

午後はカルチャーショー!!
子どもたちのダンスや先生方の歌を見せていただいた後、私たちの歌やダンス、手品を披露!!子どもたちの衣装もダンスもとてもかわいい♡だけでなくとっても上手!!! 楽しかったー

カルチャーショー

8/17 朝にスラムの学校訪問。
チームにわかれて3つをまわりました。墓場の中にある学校もあれば建物の中にあるものも。ユニークな授業で楽しそうに学んでました。

学校訪問

途中の道で象に車を止められるハプニングも!?
その後は「アーロン」で買いもの。

アーロン

今までとはまったく違う近代的でりっぱなお店。
貧富格差を感じます。…
最後の夜はスタッフさんとお話したり、歌ったり♪メンバーのBirthday Partyも☆おめでとう!!!!

象に遭遇!?

Birthday ケーキ

8/18 スタッフさん、子どもたち、バンガラとお別れの日…お世話になりました!!

アバールデカホベ!!

第49回ACEFスタディツアー参加者名簿(2015.8.5-8.19)

Aチーム(ネトロコナ地区)

1	荒谷　出	Aratani Izuru	共愛学園中学高等学校宗教主任
2	青柳　佳奈子	Aoyagi Kanako	弘前大学4年 医学部
3	浦川　実咲	Urakawa Misaki	青山学院女子短期大学2年 現代教養
4	吉田　恵	Yoshida Kei	東洋英和女学院高等学校3年
5	三富　玉貴	Mitomi Tamaki	共愛学園高等学校2年 英語
6	山中　楓菜	Yamanaka Funa	山梨英和高等学校2年
7	小出　真司	Koide Shinji	横須賀学院高校1年

Bチーム(ジャマルプール地区)

1	天野　海走	Amano Kaiso	横須賀学院中学宗教主任
2	前田　恭子	Maeda Kyoko	ACEF事務局長
3	橋島　悠子	Nudeshima Yuko	共愛学園中学高等学校教諭
4	牛山　結貴	Ushiyama Yuki	青山学院女子短期大学1年 現代教養
5	川嶋　乃笑	Kawashima Noemie	女子聖学院高等学校2年
6	和田　晃一	Wada Koichi	横須賀学院高校2年
7	鈴木　茉里花	Suzuki Marika	東洋英和女学院高等学校1年

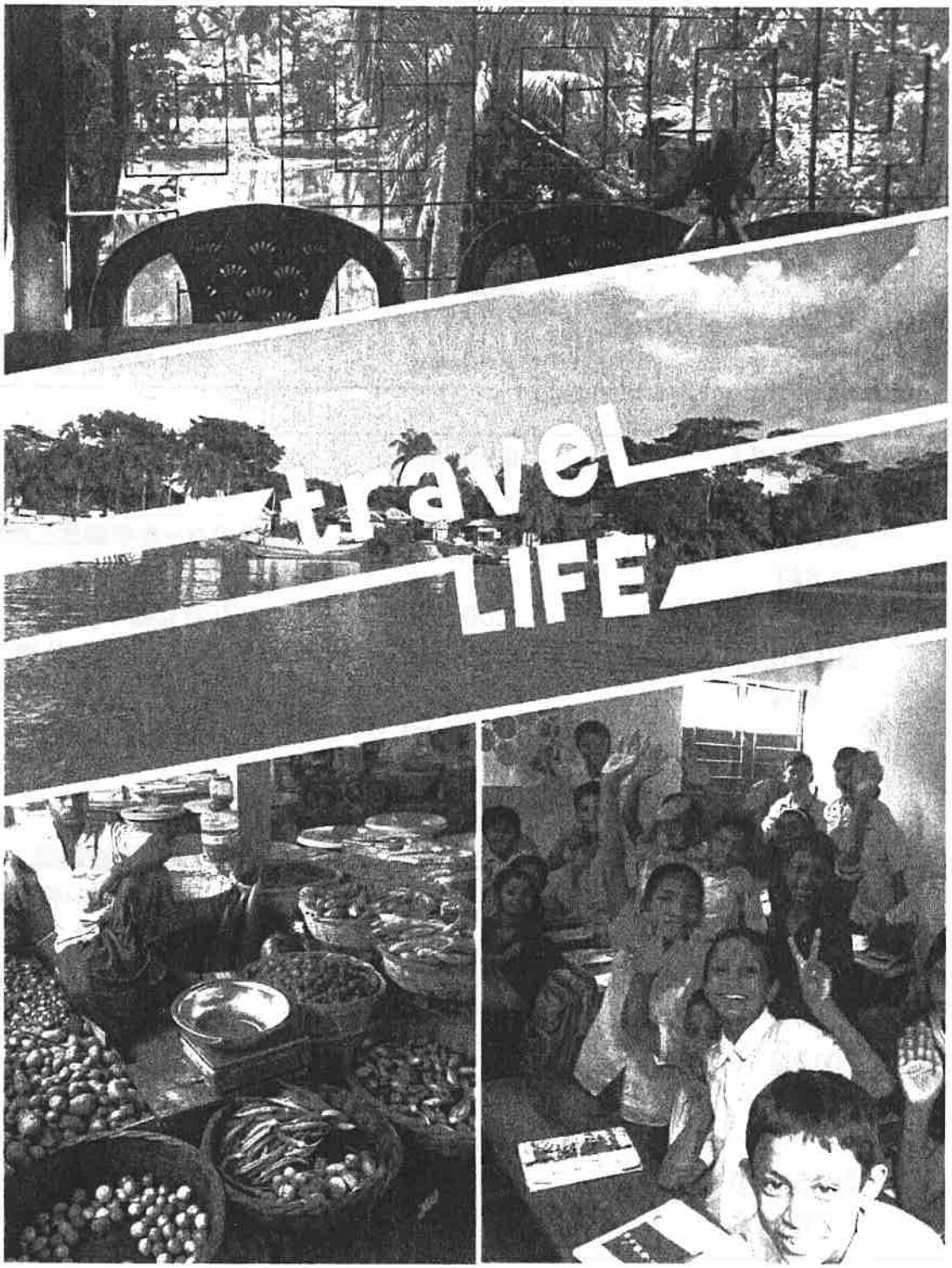
Cチーム(ボリシャール地区)

1	井上　儀子	Inoue Noriko	ACEF事務局
2	豊岡　美智子	Toyooka Michiko	養護教諭
3	木村　彩	Kimura Sai	青山学院女子短期大学2年 現代教養
4	越智　遥	Ochi Haruka	青山学院女子短期大学2年 現代教養
5	網野　理彩	Amino Risa	山梨英和高等学校2年
6	飯塚　未久	Iizuka Miku	共愛学園高等学校2年 英語
7	小川　ゆり	Ogawa Yuri	東洋英和女学院高等学校1年

日程表

Date	Time	Activities
2015.8.5 WED	0.20 AM 12.10 PM	羽田出発 ブーバイル事務所到着
2015.8.6 THU	10.00 AM 3.30 PM	オリエンテーション ガジプールの市場で買い物
2015.8.7 FRI	9.00 AM 8.00 PM	各地区へ出発 各地区で夕食
2015.8.14 FRI	9.00 AM	ブーバイルに戻る
2015.8.15 SAT	10.00 AM 4.00 PM	BDP スクール卒業生と対談 ZOO に遊びに行く
2015.8.16 SUN	8.00 AM 10.00 AM 4.00 PM	バドゥーン教会で礼拝 職業訓練校訪問 カルチャーショー
2015.8.17 MON	10.00 AM 9.00 PM	スラムの学校訪問 アーロンで買い物 ラップ・アップ・ディスカッション
2015.8.18 TUE	8.30 AM 9.30 AM	閉会礼拝 ダッカ出発
2015.8.19 TUE	7.00 AM	羽田到着

感想文



ネトロコナで感じたこと

荒谷　出

いつものように、帰国してすぐ仕事に復帰。山積みの仕事に追われるうちに、つい２週間前のバングラデシュで感じた心の高揚は、もうずいぶんぼんやりとしてきつつあることに、愕然とさせられます。そんな、すぐに日常に呑み込まれてしまう自分に少なからず失望を感じながらも、今回の旅で再度感じたこと、新しく発見したことを書きとめたいと思います。

今回、最も強く感じたのは、「変化」でした。初めてバングラデシュを訪れた１５年以上前、携帯などは存在せず、電話はほとんどつながらず用をなしていませんでした。マイメンシンへと向かう道路には、道沿いに数え切れないほどの女性や子どもたちが、砕いたレンガを頭に乗せて列になって運び、凸凹の道を補修していました。

2 回目の訪問だった５年前。ジャマルプールの田舎でも、若者たちまで、みんな携帯電話を手に、写真をとったり、連絡を取り合っていました。ものすごい変化でした。

今回の旅、ネトロコナのろくに電気も通っていないような田舎の村でも、人々はスマホを駆使し、田んぼのあぜ道の横にあった、ちっぽけなみすぼらしい売店にまで、小さな冷蔵庫が置かれていて、冷たいジュースを飲むことができました。５年前には、スタディツアーの最後に冷たく冷やされた飲み物を見つけて、参加者全員が形相をかえてそれに飛びついた記憶があります。

そして何よりも、ダッカとマイメンシンの間に開通した高速道路。１５年前には想像も出来なかった広く舗装された道路を、所狭しと押し寄せる車の群れが１００キロ近いスピードで疾走していました。でも、その高速道路を平気で逆走してくる車やリキシャの存在は、どこか変わっていないバングラデシュを感じさせてくれました。

表面上、激しく変わっていく人々の生活を目撃する中で、それでも変わらないものがあるとすれば、それは人々のおおらかさ、人と人との距離の近さなのかもしれません。今回の旅では象を使ったボッタクリ事件に遭遇しました。ダッカの町へ向かう幹線道路の真ん中に、突然巨大な象が３頭出現。道行く車の前に立ちはだかると、運転手がお金を差し出すまで動こうとしません。あまりのことに、日本からの一行は大騒ぎ。でも、スタッフは平然と鼻歌なんか歌ってます。

スタッフのヘモントさんに、その体験を継げると、彼はにやにやしながら、「よくある事。オシュビダナイ。バングラではあの象使いたちに人々は寛容なんだよ。彼らも非常に貧しくて大変だからと、自ら追いかけていってお金を渡す人も少なからずいるんだよ。」

みんなが助け合って生きる知恵と心が、まだまだ脈々と生きている国の人々の生活に、心を温められ、自分の国で失われつつあるそんな心を、わたしたちも持ち続けていかなければと感じさせられました。参加した青年たち一人一人の心にも、そんな思いが芽生えてくれることを願ってやみません。

忘れられない２週間

弘前大学　４年
青柳　佳奈子

バングラデシュから帰国し、忙しい日常に戻りつつあります。そんな中にあっても、スタディーツアーでの２週間の記憶は薄れることなく、鮮明なものとして残っています。

私がスタディーツアーに参加したきっかけは２つあります。１つは将来国際協力に携わりたいという思いがあったから、もう１つは自分の視野を広げたいと思ったからです。私は医学部に所属しているため、将来は医師として働きます。今回、医療系のスタディーツアーではなくACEFのスタディーツアーに参加したのは医療とは別の視点からバングラデシュを見てみたいと思ったからです。そのために、自分が医学生であるという意識はできるだけ持たず、１人の人間としてバングラデシュを楽しみ、バングラデシュについて学ぶ、ということを２週間心がけました。そのことを意識したおかげで、自分の感情に素直になることができ、心から楽しむことができました。また、バングラデシュや日本のことについて考えることができました。

スタディーツアーを通して学んだことはたくさんあります。その中でも特に学んだことは国際協力や支援の在り方についてです。スタディーツアーに参加するまでは、支援は一方的にしてあげることだと思っていました。しかし、BDPスタッフの方の話を聞き、BDPの働きを知る中で、支援というのは現地の人たちの考え方や声を大切にしていくことが１番重要であるということを学びました。また、上からするものではなく、共に生きるものとして、当たり前のこととして行うことであるということも学びました。

国内の支援でも、同じことが言えると思います。困っている人を助けることは特別なこと、心優しい人がすることという印象があります。しかし、そのような敷居の高いことではなく、家族や友達が困っていたら手を差し伸べることと同じであるということに気が付きました。

私にとってバングラデシュの人たちは助ける対象ではなく友達です。実際のところ、スタディーツアーでも食事などの生活面では全面的に助けてくださり、元気いっぱいの子供たちからはエネルギーをもらいました。

最後のラップアップミーティングでアルバートさんが、「大切なことは、スタディーツアーから帰った後どう生きていくかだ」と仰っていました。日本にもバングラデシュにも助けを必要としている人は多くいます。特にスタディーツアーではこどもたちのこと考えさせられました。将来は、そのような日本やバングラデシュのこどもたちのために働きたいと思います。

スタディーツアーの２週間、自分のことを見つめ直し、世界に目を向けることができました。また、多くの出会いに恵まれました。BDPのスタッフの方、ACEFのスタッフの方、一緒に参加したメンバー、スタディーツアーに関わってくださったすべての方に感謝しています。

二回目のバングラデシュ

青山学院女子短期大学　二年　浦川実咲

今回二回目の参加を決めた理由は、短大二年生というこれからの事を考えて行かなくてはならない大事な時に、去年自分に様々な変化を与えてくれたスタディツアーでなら自分と向き合って新たな変化を産み出す切っ掛けになるのではないかと考えたからです。

去年行った地区も同じネトロコナ地区でした。なぜ同じところに行ったかというと、去年の影響がどんな形であれ、あるかどうか知りたかったからです。去年のスタッフさんと子供たちにもう一度会いたい、という思いもありました。去年はカメラを持ちかえってしまう子がいたり、ペンや風船をくれ、とせがんでくる子がいたりと、様々な問題がありました。他にも、郷にいては郷に従え、お互いのためにも大きい男の子たちと距離を置くという決まりも大切にしていました。そのため今年も、と私は警戒をし続けていました。しかし途中で不審に思いすぎていたな、と気づいたのです。去年あまり英語が通じず私たちをずっとからかってきた十五歳くらいの少年グループから距離を置いていました。しかし今年は私が逆に困ってしまうくらい英語が堪能になっており、会話することもできたのです。自分は考え過ぎていて不審に思いすぎていたな、と反省しました。もっと早くそのことに気づいてもっといろいろ話したかったなあ、次また行けたら覚えていてくれたらいいな、等と思っています。　他にも気づいたことがあります。私は、沢山吸収していろいろ知らなければならない、とずっと考えてきました。今はそれが本当に必要な時だ、とスタディツアーが始まっても思っていました。確かにそれも大切ですが、私にはもっと大切なことがあったのです。それは、何を吸収するべきで、何を知るべきかをまず知ることが大切なのだ、ということです。アルバートさんからこんな質問をされました。「十年後のあなたはどうなっていますか。」私は自分の今後を考えるのに必死でした。いろいろ学ばなければ、沢山吸収しなくては、と。しかし本当に大切なのは自分と向き合い、今何をするべきかをまず考えることだったのです。そんなことはもっと早く気付くべきことで、そんなことにも気付けなかったのか、と恥ずかしくなりました。このことに気づかせてくれたアルバートさんやまた様々な変化を与えてくれたバングラデシュ、子どもたち、スタッフさんたちに感謝したいと思います。

二度目のスタディツアーを終えてさらにバングラデシュがさらに好きになりました。また必ず行きたい。そして今までのお礼がしたいと思っています。皆が何事もなく健康でありますように。

バングラデシュの子供たちに出会って気づかされたこと

東洋英和女学院高3 吉田恵

2週間のバングラデシュの生活を終え帰国した時、バングラデシュの空間とはあまりにも乖離していて、何とも言えない気持ちにさせられました。清潔な水、温かいお風呂、整備されている道……先進国と発展途上国との差を改めて感じました。
私はネトロコナに1週間滞在し、滞在中私たちは7つ全ての BDP スクールを訪問することができました。外の光だけで勉強していて扇風機もないところが多く、初めは驚きのあまり口に出してその学校の感想などとても言えませんでした。クラスの中は床がぬかるんでいるところもあったり、土の匂いと湿気と汗が交じった独特な匂いがして勉強するような場所とは思えませんでした。しかし、そんな中で子供たちは目をキラキラさせながら勉強していて、先生が一人を当てても全員が一辺に答えてしまうような元気で勉強を本当に楽しんでる子供ばかりでした。学校に通えていること、勉強できていること、自分の教科書やノートがあって自分はペンで字が書けていること、全てのに感謝していることが伝わってきました。私たちは当たり前のように毎日学校に通えて、冷房暖房がきいている教室で勉強できていることに感謝して真剣に取り組んでいるでしょうか。少なくとも私はバングラデシュに行く前にまではこのような生活ができていることに感謝することを忘れていたと思います。すぐに小さいことにイライラしたり悩んだり、自分が欲しいものには手をどんどんのばしたり、真面目に勉強に取り組んでいるなかったり……バングラデシュの子供たちをみてそんな自分が恥ずかしくなりました。また、将来の夢を子供たちに聞いた時、特に印象的だったのは「先生になりたい」言った子が多かったことです。周りに意欲的な先生がいるからこそそういう子が増えているのだと思いました。実際、授業をしている先生たちの顔も輝いていて自分自身が楽しんで授業をしていることが分かったし、信頼関係をの上で質の高い教育が成り立ち、こどもの未来の可能性もや希望が広がっていく様子を感じとることができました。その中で根本的に軸を支えている ACEF や BDP の働きの凄さにも感動しました。バングラデシュの子供たちはみんな個性的で才能に溢れています。その才能をまだ自分の国で生かすことのできる場があまりないという現実を知りました。その問題を解決する一歩として教育支援があるこではないかと思いました。

ドンノバッド

共愛学園高校２年　三富玉貴

私はこのスタディツアーに参加して、本来の人間のあるべき姿を知りました。日本の生活は、携帯やテレビ、洗濯機など電気がないと動かないもので溢れ、それらに依存しています。私はそれらの電子機器が、生活から消えてしまったら不便な日々を過ごすのだろうと心の中で思っていました。しかしこの考えは間違っていたのだと、バングラデシュに行って気づきました。電子機器に頼らないバングラデシュの生活は、とても人間の温かみを感じました。私はいつから電子機器の冷たさに依存し、当たり前であった人間の温かさを忘れてしまっていたのだろうか。今こうして日本で生活していて、電子機器に囲まれる生活に慣れてしまっている自分がとても情けなく思います。だからこそ、温かみを感じられたバングラデシュの生活に本当に感謝しています。

私は、日本に帰ってきてから日本とバングラデシュの違いにとても敏感になっています。道路を見ただけで“わ―”と心が高ぶる自分がいて、いかにバングラデシュで得たものが大きいものなのかがわかりました。私が一番心に残っていることは、子どもたちのことです。バングラデシュの子どもたちは、素晴らしいキラキラした瞳で勉強をしていましたが、中・高に上がれる子どもは少なく、大学に行き自分の夢を叶えられる子どもたちはほんの一握りです。このような子どもたちがいるというのに、私はいつも、“めんどうくさい”“つらい”などネガティブな言葉ばかりを言っていました。学べることを当たり前だと思っている私たちは、どんなに幸せなことか…。恵まれた環境に感謝して日々を過ごすべきなのだと思いました。

バングラデシュに行って改めて笑顔は万国共通の言葉なのだと感じました。ベンガル語という言葉の壁は大きいものだが、心と心がつながったと私は思います。笑顔という言葉が私たちにはあります。笑顔という言葉で溢れ、心が通じ合う世界になることを願います。

日本とバングラデシュどちらが幸せかと、問われると私は少し考えてしまいます。幸せの価値観は人それぞれ違うということもありますが、それ以上に二国を過ごしたうえで日本の生活は恵まれているからこそ、バングラデシュの素晴らしさにも気づくことができたのだと思います。

最後になりましたが、スタッフのみなさん・一緒に過ごした仲間たちに出会えたことに感謝します。バングラデシュの二週間は、私にとって宝物です。ありがとうございました。

バングラデシュに行き思った事。

山梨英和高等学校 2年 山中楓菜

このツアーの中で忘れられない言葉があります。それは、ネトロコナで聞いた言葉です。ネトロコナには一面田んぼと言っていいほど田んぼがあります。その風景は本当に綺麗でした。そこでは、毎日牛が土を耕して、多くの人が田んぼで仕事をしていました。その言葉はあの光景を見ただけでは想像もできないものでした。それは、「今見えている田の所有者は1人で、働いている人はみんな日雇いだ」というものです。本当に驚きました。私は田んぼで働いている人はそれぞれが自分の田んぼを所有していると思っていました。だから、その言葉を聞いた時、田んぼで働いている人はどれくらいの収入があるのか、と考えてしまいました。

また、昨年参加した人から空港には物乞いの人が沢山いた言うことを聞いていたのですが、今年は目にすることがありませんでした。ツアー中にも出会う機会が少なく、物乞いをして生活していた人は何処へ行ってしまったのだろうと思いました。移動途中の車の中から様々な景色を見ましたが、家の違いに本当に驚きました。ここに住んでいる人がいるのかと思うようなビニールで覆った小さな家、木でできた家、トタンの小さな家があると思ったら、綺麗なコンクリートの家や大きいビルもありました。それぞれの地方から帰った後に行ったスラムの地域では道の上で生活をしている人を見ました。また、空港に行く途中に見た景色も忘れられません。ダッカに近くなってきたところで何でこんなに電柱が立っているんだろう？と不思議に思うほど沢山の柱が立っていました。その柱が立っていたのは畑のような場所でした。しかし、以前は田んぼだったと聞きました。ダッカには大きな建物が沢山あったり道路も綺麗だったり、農村部から都市に行くと発展しているんだと実感します。昔田んぼだった場所を畑にした理由はこれからその場所にも建物を建てて行くからだと聞きました。そして、見た多くの柱もそのための物だと聞きました。柱が立っていたのは本当に広い範囲です。その場所に建物が建つ想像をしても中々考えられません。

また、以前田んぼだったときに仕事をしていた人は仕事がなくなりどうしているのか、きっと多くの人が仕事を無くしたんだと考えました。今のまま、これからもっともっと発展していくと、仕事のない人とある人、お金を持っていない人と持っている人との間にどんどん貧富の差が広がっていくんだと考えさせられました。

バングラデシュには、教育の問題、子供の問題、女性問題、生活の問題など、まだまだ沢山の問題があります。今回見て学んだのはその極一部です。正直、この2週間の中でそのような問題が本当にあるのかと思ってしまう事も何度もありました。でも、2週間を振り返ったり、帰ってから色々調べたりするとやはり問題は存在する事に、もっと知らなければいけない事が沢山あると思いました。

また、このスタディーツアーを通して感謝すること。これは本当に大切なことだと学びました。ツアー中たくさんの感謝がありました。ツアーが始まってから終わるまで。数え切れないほどです。ツアー中関わってくれたスタッフさん。毎日毎晩建物の入り口で安全を守ってくれたスタッフさん。ご飯を作ってくれたクックさん。私たちに命をくれた動物たち。楽しい時間を過ごさせてくれた子供達。ツアーに行かせてくれた家族。スタディーツアーに関わってくれた全ての方。そして日々生活していく中で感謝をしないで生活はできないと学びました。また、私の生活には多くの人、物が関わっていることに気づきました。多くの命があって、私たちは生きれることに気付かされました。それでも、私は日々感謝することを忘れていたことに気づきました。井上さんが話の中で言っていた「人間が人間らしく生きていく中でなってはならない上限がある」それは、「感謝することを忘れるということ」これを聞いて、まさに私はしてはいけないことをしていたんだと自分が恥ずかしくなりました。今回のツアーで学んだ感謝することの大切さを決して忘れることのないように生活していきたいです。このスタディーツアーに参加する事ができ、本当に良かったです。ありがとうございました。

バングラデシュで学べたこと

横須賀学院高校１年　小出真司

私は、ダッカに最初ついてからずっと衝撃を受けることが多かったです。まず、空港を出ると道にはゴミだらけで強烈な臭がしたこと、車が多くずっとクラクションの音が聞こえること、道は、でこぼこしていて遊園地のアトラクションに今乗ってるのかなと思うくらい揺れること、私は、今までの人生になかったことが一気に起こって何が何だか分からなくなってプーバイル行きの車に乗っていた時は何も考えることができませんでした。こんなことが急に起きたから二週間もこんな所にいるのかと、最初は不安で仕方なかったです。だけどBDPのスタッフさんはみんなやさしく、安心できて不安はすぐに消えました。

Ａチームの人はみんな今日本が、世界がどうなっているのかよく知っていました。なのでシェアリングをすると政治の話、経済の話などの話をしていました。私もニュースはちょっとは見ていたので政治についても経済についてもわかっているつもりでした。しかしシェアリングでは、半分位知らない事でした。なので私の知らない事を知れたのでシェアリングは私にとってとてもいい時間でした。

ちょっと悔しいのは、みんなバングラデシュの細かい所まで見ているのに、自分はあんまりたいした事が言えなかったし、沢山意見を言うこともできなかったです。それが悔しかったです。

バングラデシュに行って日本での生活に本当に感謝しなければいけないと思いました。普通に勉強出来ること、もので溢れていること、日本は本当に恵まれていると思います。私はバングラデシュの子どもたちが、もっといい環境で勉強出来るよう何かしていきたいです。

バングラにまた行きたいです。

同じ希望を抱くことができるように

横須賀学院　天野海走

クラクションの音、砂埃、ごみの臭い、井戸水、手で食べる食事、停電などなど、私たちが暮らす日本とはまったく違う環境で、２週間をすごしてきました。その中で、バングラデシュの人たちと出会い、たくさんの人たちの優しさに触れ、子どもたちが希望をもって学ぶ様子を見て、大きな力を与えられて日本へ帰ってきました。

今年は、雨に悩まされることもなく、よい気候の中を過ごすことができました。農村で１週間をすごしたジャマルプールでは、夜に停電になると外に出て空を見ました。停電で真っ暗になった空には満天の星を見ることができました。空いっぱいに輝く星、天の川、時折見られる流れ星、それらはとってもきれいで、ずっと見ていても飽きません。建物の電気がついて、あたりが明るく、目にまぶしい光が入ってくるときには見えない星も、電気が消えて真っ暗な世界になるとキラキラと輝きだします。星は、いつも同じように空にあるのに、明るいときには気づくこともなく、見ることもできません。しかし暗くなると、目の前にはっきりと現れてきます。

もしかして、私たちの同じようなことが私たちの日常の生活の中でも言えるのかもしれないと思いました。わたしたちは、バングラデシュの人たちとの出会いの中で優しさを感じたり、子どもたちの学びの様子の中に希望を見たりしましたが、私たちが彼らの中に見ているものは、本当は私たちの中にもあって、見えていないだけなのかもしれません。日本での私たちの生活の中には、余計な光がいっぱいありすぎて、本当に大切な美しい光を見ることができなくなってしまっているのではないでしょうか。バングラデシュの貧しい中でも助け合って生きる人々のシンプルな生活の中で、普段私たちが目の前にありながらも見逃してしまっている事柄をはっきりと見せてもらったような気がします。

ところで、今回のツアーの中でＢＤＰスクールで働く先生のお家を訪問する機会がありました。たくさんのもてなしを受け、様々な会話がなされる中で、「先生としてのやりがいは何ですか？」という質問が投げかけられました。その先生は、「学校での働きを通して、子どもたちの人生を変え、バングラデシュの社会を変えていくことができる。それが一番のやりがいです。」と答えていました。同じように学校で働くものとして、共感する言葉です。ツアー中の学校訪問では、どこの学校でも子どもたちが楽しそうに、真剣に学んでいました。子どもたちが希望をもって学ぶ様子をはっきりと見て取ることができました。ＢＤＰ小学校や職業訓練校を卒業した生徒たちが話をしてくれたときも、教育を受けて自分たちの人生が変えられていったことを話してくれました。学ぶことによって変わることができる。そんな希望が教育には本来的に備わっているはずです。しかし、日本で生活をしていると、それがバングラデシュほど強く感じることができないのはなぜなのでしょうか。それは、明るいときには夜の星空がよく見えないのと同じで、私たちの生活の中に余計なことがたくさんあって、私たちの目を見えにくくしているのではないでしょうか。本当は必要のないたくさんのことにとらわれて、心を奪われて生活をしているから、本当に大切な美しいものを見逃してしまっているような気がします。

わたしたちがバングラデシュの人たちの中に見ることができた希望は、きっと私たちの中にもあります。余計なことにとらわれることがないように、バングラデシュの人たちと同じ希望を見ることができるようにと願います。

一言で言えば

前田　恭子

バングラデシュを一言で言えば、「伸びたゴムのようだ」といつも思います。今回のスタディツアーで訪れた際にも、前回よりも更に近代的な部分が増えた首都ダッカの街並みや高速道路を見て思いました。“デジタルバングラデシュ“として世界の国々と肩を並べたい。今の政府はそう望み発言しています。たしかに、先進的なテクノロジーは存在し、コンピューターでも最新のものが手に入りますし、それをいとも簡単に駆使している人々も多いです。BDP の人たちも、政府関係への提出書類や、地方自治体への申請等は、手書きでは受け入れてもらえないようになっているとか、苦労の多い事です。

ダッカの本部では、一人一台のＰＣで仕事をしています。それが必要だからです。BDP の職業訓練校にはコンピューターのクラスがあり、良い仕事に就くために、若い男女が学んでいます。しかし、地方の BDP の事務所では、ＰＣもありませんし、使いかたも知りません。ましてや、ボクシガンジの事務所などは、電気の来ていない地域にあります。周囲は森と畑や田んぼ、子どもたちは貧しい身なりで、裸足で事務所を覗きに来ていました。ダッカと同じ国とは思えません。ゴムの先はどんどん伸びて、先進国と同じレベルまで行き、しかし、シッポは電気も無い、インフラと呼べるものが全くない、BDP が建てるまで学校と呼べるものもなかった、そんなところにくっついているのです。

富裕層はとんでもなく豊かで、ゴムの先端にいます。貧しい人々の事を気にかけていないようです。政府は富裕層が動かしているのです。そして、ゴムのシッポにいる人たちは、都市でも、農村でも、その日暮らしで、一日に１回か２回の食事がやっとの生活です。都市には物乞いが多く、彼らはプロの物乞いです。他に就くべき仕事が無いし、生活保護という制度もありません。国自体が貧しいからです、でもお金持ちはいます。

ダッカに地下鉄を通すプランがあり、日本が請け負ったと聞きました。下水も整備されておらず、どこにでもゴミが捨ててある、そんな町には先にやらなければならないことがあるのではないかといつも思います。人びとの意識を変えるには時間がかかります。しかし、ACEF と BDP は 25 年かけて、たくさんの子どもたちを育て、女性に活力を与え、教育が必要だと、村やスラムの人びとが思う様になる意識の改革に貢献してきました。　BDP の学校では、清潔に暮らす事の大切さも教え、子どもたちから周囲へと浸透しつつあります。そういった子どもたちが成長し、バランスよく発展するバングラデシュを造って行く、そんなことを夢見ています。

願わくは、日本も含め、先進国と言われている国々が、自国の利益のためでなく、本当にバングラデシュのために、国民が必要としていることを支援してくれますように。先進国が経験した失敗をせずに発展する手伝いをしてくれますようにと思います。

あの美しい国を美しいままで、優しい人々が優しいままで、豊かに暮らせる日が来ることを祈っています。

This is just the beginning…

共愛学園高等学校　講師　櫛島悠子

とにかく頭を使った2週間でした。自分の価値観やものさしが通じない世界というのは、とても混沌としていて、矛盾だらけで、答えが出ないので怒りのような気持ちも湧きました。

東日本大震災の被災地を訪れたとき、こんな風景は見たくなかったと不機嫌さを隠さなかった著名人がいました。こんな気持ちだったのかなと、バングラデシュのでこぼこ道に揺られながら、決してきれいとはいえない熱風をあびて、美しい田園と処理しきれないゴミの山が同時に目に入る風景を眺めながら、漠然と思いました。

バングラデシュの人々は、いつも一生懸命です。朝早くからの農作業も、洗濯や食事の準備も、学校での学びも遊びも、BDPのスタッフさんの私たちへの振る舞いやおもてなしも、あらゆる場面で一生懸命さを感じました。日本にいる私はこんなに一生懸命だろうかと考える反面、彼らもせめて眠りにつく前はほっとしてほしいと願います。国家として独立してから45年という年月をどう判断するべきなのかわかりませんが、一生懸命でなければ生きられないのかもしれない彼らに対して、「もっとのんびりいこうよ」とか「行政は何をしているんだ」と思うのは、きっと私のエゴです。

戦後の高度成長経済期の日本を、「あの頃の日本は何もなかったけれど希望だけはあった」と、作家の村上龍さんは言いました。だから頑張れたのだと。今回バングラデシュに来て、子どもたちの笑顔や学びこそがこの国の希望だと感じました。どうか子どもたちの未来が、利己的な大人によって奪われないようにと、未来がますます切り拓かれていくようにと願うばかりです。

アルバートさんは、「物質的に50倍恵まれている日本人は、バングラデシュの人々より50倍幸せか」と私たちに問いました。幸せのかたちを一概にくくりたくないという私の考えは変わりません。けれど、もしバングラデシュの人に「今のあなたは幸せですか？」と問われたら、胸をはって幸せだといえる自分でいなければいけないと思っています。そして、バングラデシュよりも恵まれすぎている多くの選択肢に出会ったときは、選択に最善を尽くし、責任を持つことも必要ではないかと。

この作文のタイトルは、最終日にアルバートさんが私にメッセージとしてくれた言葉です。「This is just the beginning… We have a long way to go together.」。アルバートさんは、最後の together に赤ペンで下線を引きました。今の私にはとてもずっしりと響く言葉で、正直抱えきれません。日本での日常のなかにあっても、共にあるということを根底に持てる自分になりたいと思いました。

最後に、2週間を共に楽しみ学んだツアーメンバーのみなさん、BDPスタッフの方々、サポートしてくれた方々、心の支えであった大切な人たち、関わってくださったすべての方に感謝します。かけがえのない経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

ツアーを通して感じたこと

青山学院女子短期大学人間社会専攻１年　牛山結貴

私は、自分とは全く違う人生を送る人と関わりたいと思いこのツアーに参加しました。実際参加してみて、生活面では不自由なことが多いけど、日本にはない素晴らしいものを体感してきました。

一つ目は、子供たちの笑顔です。向こうで何校か学校訪問をしました。そのとき、子供たちは誰もが先生の話を一生懸命聞き、積極的に前に出て回答するというような授業に対する姿勢や、何の教科が好きかという質問をしたときほとんどの子供たちが数学だと答える姿を見て、ああ、本当に勉強をすることが好きなんだなと感じました。私たち日本人にこんな意欲的に勉強に取り組んでいるのかと考えさせられた瞬間でもありました。日本よりも勉強ができる環境ではないけど、その中でも楽しそうに笑顔で勉強を学んでいる子供たちを見習って私も好きな学問をとことん学ぼうと思いました。

二つ目は、みんなで合奏する楽しさです。バングラデシュではよく停電が起きます。夜に起きると、ろうそくをつけますがそれだけだと行動範囲が限られてしまいます。そんな中でもみんなで楽器を持ち合わせて歌を歌ったり、演奏したりして暗い中でも楽しく快適に過ごしました。私はこの行動にすごく感動して、まず日本は停電も滅多にないしみんながみんな楽器を持って輪になって集まることもほとんどないから、コニュニケーション手段として魅力を感じました。また、私自身、バンドや合奏にいまいち良さを感じることができなくて、なんでみんな好きなバンドがあるんだろうと思っていました。でも、みんなで演奏すれば一体感が生まれて聞いてるだけでもその空間が体験できて、バンドや合奏の良さが少しわかりました。新しい価値観も広がったし、すぐ停電することにも不自由だと思わないところがいいなと感じました。

全体を通して思ったこともありました。それは、バングラデシュの人たちの温かさです。向こうの人たちは、本当に優しい人が多くていつも助けてもらってばっかりでした。例えば、2，3人で服を洗っていると洗い方を洗いながら教えてくれて洗うだけでなく、絞って干すところまでやってくれたり、お肉を食べれない友達にわざわざその子のために魚を用意してくれました。私はみんな気を使ってくれる人たちばかりでいいなと感じていました。でも、気を使うって自分を少し犠牲にすること、だからこそされると嬉しんだなと思っていたから、気を使ってくれているという自分の認識が間違っていると感じました。なぜなら、バングラデシュの人たちの優しい行動は、当たり前のことであって自分がしたいからする行動なんだなと思ったからです。それは、ものが少なくてお互いに助け合わないとならない環境が影響してるんじゃないかと私は思います。

現代の日本は便利だけど、バングラデシュの人のような姿が見られなくなったと感じます。ツアーに参加してその違いに気付けてよかったし、そういう人たちがいることを忘れないようにしたいなと思いました。

"キラキラ"を受け取った私たち

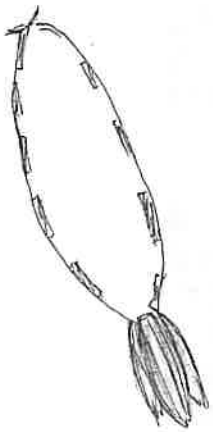
子どもたちの勉強に対する"思い"は，
キラキラとやる気で一杯でした。

子どもたちの心の中の"未来"はいつだって，
キラキラで溢れていました。

スタッフさんの優しい"心遣い"は，
私たちをキラキラで包み込んでくれました。

降り注ぐ太陽の下で働く頑張り屋さんの流した"汗"は，
キラリと光を反射していました。

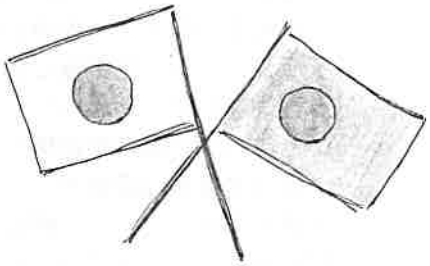
自分たちで汲んだ"井戸水"は，
太陽の光を浴びて，キラキラしていました。



道端に捨てられた沢山の"ゴミ"さんも，
光が射すと，キラキラ光って見えました。

バングラデシュで出会った子どもたちの"笑顔"は，
キラキラ輝いていました。

そして，そんな子どもたちと遊んでいるとき，
みんながキラキラしながら，
"今"を生きていました。



この沢山の"キラキラ"を，
自分の力の限り，
沢山の人に広めていくのが，
"キラキラ"を受け取った私たちの使命です。

女子聖学院高2 川嶋 乃笑

平和って何だろう？

横須賀学院　高校２年　和田晃一

僕はバングラデシュの農村部ジャマルプールへ行きました。そこではとても貧富の差を痛いほど感じました。きれいな服を着ている子からパンツ一枚の子までいました。また足元を見ても靴を履いている子、布を巻きつけている子、素足の子など見ただけですぐにわかるほど貧富の差があらわになっていました。それは、都市部ダッカの方に行くとより一層顕著になり、高級車や高層ビル、高級デパートが立ち並ぶ町中からほんの少し離れるだけで集団墓地に貧困層の人々が暮らす村が存在しています。その村の中に何十軒もの家が建ち並び、そこに住む子どもたちが通う学校もありました。その光景はとても日本で暮らしてきた私には考えられないようなものでした。

そのようなバングラデシュ国内での貧富の差の状況を実際に見ていると、まるでこの世界全体の現状を見ているようでした。

僕はバングラデシュで貧富の差の問題に対し、BDP スタッフや JOCV の人たちが真剣に解決に向かって努力している姿をたくさん見ることができました。

その人たちを見ているうちに世界中の子どもたちやその子どもたちを傷つける戦争のことについて考え、次第に平和についてもよく考えるようになりました。平和と一言で言ってもその環境や価値観によって人それぞれ受け止め方が違うと思います。

僕はバングラデシュに来る前はただ漠然と“戦争がないことが平和”だと思っていました。と言うよりも平和についてそれほど真剣に考えたこともなくそれしか思いつきませんでした。

しかし今回バングラデシュに来て、貧富の差が激しく、様々な宗教や習慣が入り混じっている複雑な社会の中でもなお困っている人をすぐに助け、お互いに支えあっている人々の姿を見ることができました。特に印象的だったのはスタディツアー終盤、プーバイルに戻ってきて買い物に出かけた帰りのことです。土がぬかるんでおり車のタイヤが埋まり出られなくなってしまった時、ドライバーのステファンさんが声をかけると人が集まってきて車を押すのを手伝ってくれました。

このような姿を見て助け合う力の強さと素晴らしさを感じました。それと同時に平和とは“異なる宗教や人種、文化を否定しあうのではなくお互いに受け入れあい、尊重しあう”ということだと思うようになりました。このことを広げていけば、少しでもこの世界がよりよくなり、“隣人を愛する”というところにもつながると思います。

それを理解させてくれたバングラデシュとその人たちにとても感謝の気持ちでいっぱいです。

東洋英和女学院高等部１年
鈴木　茉里花

Bangladesh
感じ考え学んだこと

バングラデシュに興味を持ったのは、私の学校でスタディーツアーから帰ってきた先輩方の発表が毎年あったからでした。見たことのない、自分の知らない世界を見てみたくてバングラデシュに行きました。何か変わるかもしれないという期待を胸に。本でも事前学習でも知れば知るほど興味深く早く行きたいと思いました。飛行機に乗ってやっとたどり着いたその国では、路上に大量のゴミがあり、何かのアトラクションのように揺れる車内、度々起こる停電など、聞いてはいたけれど毎日が新しい発見と驚きでいっぱいでした。そして私の想像以上に楽しくて美しい日々でした。私は日本で生まれて育って不自由なくここまで生きてきましたが、出会った子供たちが私たちと同じように生きてきた訳ではなく、仲良くなった子供たちが学校に通えていないようなことも多々ありました。同じ場所で同じ時間を過ごしたのに何が私と違って彼らは教育を受けられないのでしょうか。毎日の学校訪問とオフィスに来てくれる子供たちとの時間、なにか矛盾を感じながら過ごしました。日本ではスイッチを押せば洗濯も出来、トイレも流れ、お湯もわきます、「当たり前だよ。日本なんだから」と思っていました、帰ってきて話せば大変だったねと言われます。確かに便利であればあるほど、それにかける時間も省け他のことに時間を費やせます。しかし便利であることが全て良い方向に動くとは限りませんでした、協力して助け合って生きていくのが人の道だと思いました。バングラデシュでの２週間は一瞬でしたが、沢山の方の優しさ愛に触れて守られながら過ごせました。バングラデシュで学んだことを伝えたいし考え続けていきたいです。バングラデシュに行けたこと、またそこで学べたこと出会えたことに感謝します。

一瞬の出会いでも心に深く残る出会い

井上儀子

ACEF＆BDP 創立 25 周年の年、ACEF スタディツアーの後半、プーバイルで久々に BDP 小学校、職業訓練校の同窓会が行われました。女性 8 名男性 15 名合計 23 名が集まってくださいました。お互いに自己紹介した後、小さなグループに分かれて思い思いにお話をしたり、歌で盛り上がったり、良い時を過ごすことができました。その時、思いもかけない再会がありびっくりしてしまいました。2004 年 1 月、11 年前のことが目の前にはっきりと思い出されたのです。

私はある一人の少女を取材するためプーバイルのある小さな村を訪問していました。一日の様子を知りたかったので、夜も泊めてもらえるか交渉したのですが、少女の家はあまりにも貧しい家庭なので、同じ村の中の BDP 小学校の先生の家ならばとお邪魔しました。結局その家も狭いのでダメだったのですが、その時、小学生の娘さんがちょうどコーランを読んでいる時間でした。私はすぐ目の前にコーランの本を見たのは初めてだったので、「ちょっと見せてもらっても良いですか？」と尋ねると、「はい、どうぞ。」と言われたので、手にとってパラパラとめくってみました。ところが、その娘さんの表情がさっと変わりポロポロ泣き出してしまったのです。私は何が起こったのかわからず、「どうしたの？私が悪かった？」とコーランの本を返しました。見ても良いと言ったのはただ見るだけのことだったようです。コーランはとても神聖なもので、必ず手と顔を洗って清めてから読んだり祈ったりするもので、私が洗わない手でコーランに触ってしまったので泣き出してしまったのでした。その時一緒にお兄さんもいたのですが、今回の同窓会にそのお兄さんと妹さんの二人揃って来ていたのです。お兄さんの方から、「あなたは私の家に来たことがあります。」とニコニコと話しかけられ、すっかり大人になった二人にびっくりしました。声をかけてもらわなければ全くわかりませんでした。当時わずか 5 分か 10 分の訪問だったにもかかわらず、私のことを覚えていてくださったのです

カティラ村でもたくさんの嬉しい再会がありました。初めてカティラを訪問した 1994 年春、BDP オフィスの台所で私たちのためにお料理を作ってくださったショバさん、その後健康を害して料理の仕事はできなくなってしまいましたが、毎朝夕、ヤギと羊を連れて散歩をしていました。2006 年夏に出会ったピアンカとジュイ、小さな可愛い女の子が二人とも大学生になっていました。2008 年 2 月に出会ったリリー、その後ダッカの大学に行ったと聞き、村に戻ってきたら結婚、出産。幸い実家からそれほど遠い村ではないので、行ったり来たりしているようです。2 年前に会った BDP 卒業生のシェトゥは、今夏、市場でバッタリ出会いました。何と 34 歳の男性と結婚し今大学に通わせてもらっているようです。

たった 2 週間のスタディツアーの中でほんの一瞬出会った子どもたち、子どもたちにとっては、ACEF スタディツアーメンバーとの出会いはいつまでも記憶に残る楽しいひと時となっているようです。会うたびに成長している子どもたちの姿を見るのは、何にも代え難い喜びです。BDP の教育支援が良い成果を出している故に、こうして同窓会にも笑顔で集まってくるのだと実感しました。

毎日の生活の中に、感謝と祈りの時間をもつこと

小学校　養護教諭
豊岡美智子

朝・夜には聖書を用いて礼拝、食事前の祈り、夕食後にはシェアリングの時間を持てたことがとてもよかった。日本での時計を見ながらの生活では、いつも次のことに追われ、感謝と祈り、そして内省の時間を持つことは少ない。朝には「新しい一日を迎えられたこと」、三度三度の食事の前には「食べ物、食事づくりに携わってくれた人」、夜には「今日を無事に過ごせたこと」を口に出して感謝をみなで行った。そして、弱く小さくされた人たちのことをおもい、希望を祈った。

ボリシャールでは、少数民族のガロ族の家族を雇用し支援をしている養殖場のオーナーが私たちのために、怯えるアヒルを捕まえプレゼントをしてくれた。その２羽を BDP スタッフのビップルーさんとジョンさんらが屠り、クックのモンクシさんらがカレーにしてくれた。私たちはその一連の過程を見て、食べ物には“いのち”があり、私たちの口に入る前にはたくさんの人の手がこめられていることを、実感できた。安価で簡単に手に入る食事に慣れて、電気も水も当たり前に快適に暮らしている私たちだからこそ、衛生状態がよいとはいえないバングラディシュにて「健康で安全に今日も送ることができて、神様ありがとうございます」と心より感謝の気持ちを口に出し、共有をできた。

２週間同じところへ行き、見て感じた仲間が聖書をもとに自身のこれまでの経験やバングラティッシュでの生活のおもいを語ってくれるのが毎日の楽しみだった。

神様によばれて集まったメンバー２１人、ＢＤＰスタッフのみなさんありがとうございました。

「いただきます」「ごちそうさまでした」

青山学院女子短期大学　木村彩

バングラデシュでの2週間は非常に濃いもので、様々なことに考え馳せるものだった。またバングラデシュには、私が気付かぬ内に失ったものが多く存在していた。その中でも「いただきます」と「ごちそうさまでした」、2 つの言葉が持つ奥深さをこの場を借りてお話しさせていただきたい。

少数民族・ガロ族の一家を訪問した際、2羽のガチョウを頂いた。1羽は必死に足をバタつかせ、縄を解いて逃走を試みた。もう1羽は恐怖のあまり失禁をした。生への渇望・死への恐怖を前にして私は同情したが、後日昼食となって私の口に入ることとなる。首を落とされたガチョウは血生臭く、羽毛を剥ぎ取られている姿は無残なものであった。白濁したガチョウの目は今でも目に焼き付いて忘れられない。あいにく頂いたガチョウはお世辞にも美味しいと言えなかった。しかし自らが奪った命を粗末にすることは出来ず、食べないという選択肢はうまれなかった。

2週間の中には厨房に入る機会があり、農場・牧場を見学する機会が与えられた。薪で火加減を調節している厨房は暑くて、何をしなくても汗が噴き出た。加えて床に屈みこみ、右手だけでの作業（左手は不浄なので、左手で食べ物を扱えない）は、イライラのフラストレーションを溜めた。農場・牧場の見学を通して印象に残っているのは「臭い」だ。農場全体に広がる葉物の青臭さは心地良くもあったが、採れたてのきゅうりに漂うどぶ臭さには絶句した。牛舎・鳥小屋の前に立ったとき、あまりの獣臭さに鼻がもげるようであった。農業・畜産業に従事する人々は不快臭に包まれながら働いているのかと眩暈がした。だがその中で命を育む人がいなければ、生きる糧を失うことも事実である。

私たちは生きるために命をいただき、その命が大勢の手を通して食卓に運ばれることを知識として知っていた。今回その過程を目の当たりにし、五感をフル活用したことで実感する。「いただきます」や「ごちそうさまでした」は、食事に関わる全ての人や命（食事を用意してくれた人だけでなく、生きる糧となってくれた動物やその動物を飼育する人）へ感謝の意を伝える言葉であると。
今日も感謝と共に食事をする。「いただきます」「ごちそうさまでした」。

共生は強制することではなく

越智遥

私がバングラディシュへ行こうと思ったきっかけは、大学の共生という授業で貧困の国について学んだからだ。どうして貧しくなったのか、なぜ貧富の差は今となっても縮まらないのか、その国の歴史や文化を勉強した上で参加した。「誰かの話を聞くよりも、それからテレビやインターネットで見るよりも、兎に角現地へ行って自分の目でみて確認してきなさい」この言葉を受けて、ツアーに参加することが自分の考えが変わるきっかけとなる出来事になるかもしれない、もしかしたら貧しい国の人たちに何かしらできることがみつかるかもしれないと思えてきた。この時私は熱心に、どうしたら貧しい国から変えてあげられるかと、明日の生活が保障されている私たちがやらなくてどうする！と、助けてあげることで頭がいっぱいいっぱいだった。

８月５日、ダッカ空港へついてから暑さと疲労もあってのことか、周りの風景にあまりに衝撃を受けて何も考えられなくなった。覚えていることは２週間この地で私はやっていくことができるのだろうか、との不安がつのりにつのっていくことだけだった。埃っぽい町、行き交う人々や動物、散乱したゴミ、絶えず鳴り響くクラクション。悪路を冷房のつかない車で数時間かけて移動しやっとの思いで宿舎までたどり着くことができた。そんなくたくたで死にかけの私たちのところへ村の数人の子供たちがハイビスカスの花をくれて歓迎してくれた。純粋無垢な笑顔、言葉は通じないけどそこから感じる喜びとエネルギーを受け、私はそこで一気に疲れが吹き飛んだ。それから農村では適度に休憩をとりながら子供たちとふれあっていた。生活面ではＢＤＰのスタッフの方には感謝しきれない。滝のような汗をかきながら私たちの口に合うように、おもてなしの料理を作ってくださったモンクシさん、洞察力が鋭く、私たちを仲良く打ち解けようと一番に行動したファルークさん、その他にも空き時間に村の散策につきあっていただき、村の生い立ちを教えてくださったりと、私たちにとてもあたたかく気を遣ってくださったのだ。勉強しに来た身としては、どうしてここまで尽くされているのだろう、私たちが何かしなくてはいけないのにいつの間にか逆の立場になっており、申し訳ない気分と同時に自分の無力さを感じた。

学校訪問するとどこからともなく子供たちがわいてきて、私たち日本人をみると嬉しそうに手を振ってきてくれたり、名前を呼んでくれたり、何度も握手を求められたりした。私はそれがとても嬉しかったし言葉は通じないけれど、いくつか教えてもらった簡単な手遊びをやって笑って通じ合い、いつのまにか友達と変わらないそんな存在になっていた。バングラディシュの良さは沢山感じたが、一番良いところは人々の温かさだと思う。障がいをもった子でも当たり前のように他の子たちと同じように遊び、なじんでいるところや、年上の子供たちが近所の小さい子の面倒をみてあげる光景は何度も目にした。日本では近所づきあいだけでなく、家族との付き合いも薄くなっている現代で、バングラディシュではあたりまえのようにこなされていた。ここの人たちは日本のような生活に憧れている人が多い。もし未来のバングラディシュが現代の日本だとしたら、明日の生活は保障されるかもしれない。でも私たちが感じた温かみは徐々に失われていき、忙しく時間に追われた世界になるかもしれないと思うと、少し複雑な気持ちになる。助けることが共生だ（強制）と思っていたけれど、彼らの文化や人間性も大切にしなければならないし、守らなくてはならない。温かみ、心は人として大切なことであると私は今回のツアーで思い知らされ、考えを正された。

高 2 の私にできること

山梨英和高等学校二年　網野　理彩

私はバングラデシュへ行き、様々な発見や学びそして沢山の出会いがありました。まず始めに、今回の スタディーツアーに携わって下さった方を始め、全ての方々に感謝いたします。 私は以前から発展途上国に興味があり、いつか発展途上国へ行ってみたいと考えていました。そして今回、長年の夢を叶えるチャンスだと思いこのツアーに応募しました。また、このツアーに参加するにあたり私は一つの目標を掲げました。それは日本に住む、いわゆる先進国の私達に出来ることとは何か、この答えを見つけるという事です。 私はボリシャールの中にある小さな村で一週間を過ごした。そこでの思い出は、私の一生の宝物です。 私は、そこで「環境問題」について特に考えさせられました。 私は、自然破壊などの環境問題は先進国の中だけでの問題だと思い込んでいました。しかし、バングラデシュの美しい自然が確実に破壊されている現実を今回目の当たりにすることになりました。私の行ったボリシャールは上を見上げれば青い空、横には視界いっぱい広がる青々とした木々、そして大きな池が特徴的な地域でした。ボリシャールの人々の生活はその大きな池によって支えられていると行っても過言でないでしょう。彼らは、日常生活のありとあらゆる事をその池の中で行います。例えば、洗濯、食器洗い、水浴び、そしてその池に住んでいる魚も食べます。また、お菓子の袋やペットボトルも捨てます。とても、日本人には考えられないことです。勿論、バングラデシュの人々にとってもそのような汚い水を使い続けることは衛生面でも身体に良くないことは確かです。この問題は解決していかなければいけないことだと思います。例えば、浄水器を寄付する、その池の水を使わないなどの方法もあります。しかし、これでは根本的な解決方法とは言えないでしょう。浄水器を寄付したとしても、機械が壊れたら誰も直すことができません。池の水を使わなければ、生きていくことができません。確かに、日本人の当たり前からする 汚染された水を使う事自体今すぐやめるべきだと思います。しかし、バングラデシュと日本は文化も習慣も環境も全てが異なっています。だからこそ、日本の機械など物質的にものをあげるのではなく、私たちが出来ることはゴミはゴミ箱に捨てること、そして日本のゴミ処理方法を一つのアイディアとして伝え、バングラデシュで生まれ育った彼ら自身が解決方法を考えることがバングラデシュの環境問題を解決する為の最善方法だと言うことを学ぶことができました。私は、バングラデシュで二週間過ごす中で自分の無力さを強く感じました。私にはバングラデシュを豊かにすることも、世界を平和にすることもできません。しかし、私は教育を受ける機会があります。学生の私に出来ること、それは学び、一つでも多くの知識を身につけるという事です。私は、必ずまたバングラデシュへ行きたいと思います。その時には、バングラデシュの自然や風景は大きく変化しているでしょう。しかし、私のバングラデシュが大好きな気持ちは一生変わりません。沢山の人に支えられ、沢山の経験をさせてくれたバングラデシュに必ず恩返ししたいです。ドンノバ!!

本当の幸せとは

共愛学園高等学校　2年　飯塚未久

人間にとっての幸せとは一体何なのだろうか？

私はこの事を 2 週間考えて幸せとは自分自身の価値観によって決まるのかなと思った。もし、自分が幸せな生活が送れているのなら貧しいとは言えない。以前の私は貧困な国の一部の部分しか見ていなくて本当に大切なことに気づいていなかったのだ。何よりも大切なのは目に見えない部分であるのだと気付いた。

日本は確かに発展していて恵まれている。しかし、逆に物があふれていて感謝するという事を忘れてしまっていると思う。生活も日々時間に追われて学校に行ける事、仕事があるという当たり前でない恵まれた状況を当たり前と思ってしまうのだ。そして、笑うことすら忘れてしまうこともあるだろう。バングラデシュの生活は決して便利とは言えるものではなく、学校に行けなかったり、働けなかったり、十分な食べ物がなかったりする。しかし、バングラデシュの人々は笑顔で溢れていた。貧しさなんて感じなかった。そんな笑顔からくるものは豊かな心だと思う。私は毎日多くの人の優しさ、笑顔に触れてたくさんの幸せを分けてもらった。小さな事でも生活や食事や携わる人々に感謝をするということが大切だと改めて考えさせられた。日本のように先進国と言われていても見方によれば貧しい心で貧困な国で、逆にバングラデシュのように発展途上国だが豊かな国とも見る事が出来るのだ。国同士を比べるのは良くないが奥底に隠れた大切なものを読み取る事が大切なのだと思った。

教育について考えたとき教育は人生を選択するためにすごく必要でバングラデシュの子供達はそれを身にしみて感じて必死に勉強しているなというのが伝わってきた。さらに、学ぶという事を心から楽しんでいるなと感じた。私はそんなキラキラした笑顔の子供たちの顔が印象的で、今でもしっかり目に焼き付いている。私はそこまで教育の大切さを深く考えてなく、学ぶ楽しさを忘れて勉強している自分を情けないと思った。バングラデシュの子供達は 100 人小学校に入れたとしたら大学にいける子は 1 人だという事を聞いて、衝撃と共に悲しい気持ちになった。バングラデシュにはたくさんのすばらしいものをもった子がいて将来の可能性が無限大に発揮できるのに、それを生かせる場がないのはもったいないなと思ってしまった。ハイスクールに訪問した時「大学まで行きたいですか？」と質問したら皆、目を輝かせ手を挙げた。一人ひとりに夢がしっかりあって未来に希望を持っているなというのが印象的だった。私はそんな子供たちの夢が実現できる事を心から祈っている。

ハイスクールにいる子たちは BDP スクールの卒業生が多かった。BDP と ACEF のスタッフの方々の長年積み上げてきたげてきた事が形となって表れていて子供たちの教育を助け未来を繋いでいる事が目に見え胸がいっぱいになる思いだった。

私は 2 週間の中で子供たちやスタッフの方々に貧困や教育、幸せ、様々な事について考えるきっかけを頂いた事に感謝している。私の力は本当に小さなもので人々を助けることは出来ないけど時間を共にして心を寄り添えることは出来たと思う。そんな時に生まれた笑顔、一つ一つを一生大切にしたい。今、バングラデシュも進歩しているが発展しても豊かな心を忘れずにいてほしいし、心から信じている。バングラデシュで吸収した事を自分の中で少しずつ育てていつか役に立てたらと思う。今回、関わった BDP のスタッフの方々、村の人々、ACEF の方々、一緒に行った皆、送りだしてくれた家族、全ての人の支えがあってこそだと思う。心から感謝の気持ちでいっぱいだ。

見たものと伝えたい事

東洋英和女学院　小川ゆり

私は、この二週間という少しの期間でたくさんの知識と経験を得ることができました。
バングラデシュで見たことや聞いたこと、何もかもが初めて知ることばかりで、これほど充実した体験は今後そうできないものだと思います。

私は移動中窓の外を見るのを楽しみにしていました。都会では日本では信じられないような渋滞や人ごみの中を、田舎では、都会と同じ国とは思えないような自然の中を車で走っていきます。そんな中でふと、この景色はこれから失われていくのだろうかと考えることがありました。バングラデシュは発展途上国であり、これからどんどん発展していくでしょう。
自然の中に大きくて真新しい、鉄でできた橋がありました。現地の方いわく最近できたばかりのものだったようですが、その橋からこれからのバングラデシュが垣間見えたような気がしました。
こうして国は発展とともに自然を失っていくのか、もし私がまたバングラデシュに訪れたとしたら同じ景色は見ることができないだろう、と思いを巡らせているうちに、景色が輝いて見えるようになりました。
それからというもの、私は発展途上国の力強さと儚さの魅力にすっかり虜にされてしまいました。

だからこそ、この国に日本がなにか教えることは必要のないことだと思います。しかし逆に、この国から学び、私たちの生活に生かすべきことは大切なことだとも気づかされました。

日本に帰ってから会った人は皆、バングラデシュはどうだったかと訊いてきます。
私は最初何も答えられませんでした。なにもかもが日本と違う国のことを簡潔に説明するのは難しかったし、この感情を短くまとめてしまいたくなくて、何を話せばいいのかわかりませんでした。
ならばそれをそのまま伝えようと”言い表せないほど盛りだくさんの旅で素敵な国”と言うようにました。現場に行ったことのない人に説明するのは容易いことではありません。
帰国してすぐ、私がバングラデシュに滞在中に入院した祖父の元を見舞いに行きました。色々と支援をしてくれた祖父には何とかしてこの二週間のことを伝えたいと思い、写真を一枚一枚見せながら思い出を語りました。
話はとても長くなってしまったけれど、話し終えた時の達成感は何にも例えられません。他人に伝えてから初めて少し自分の役目を果たすことができたと感じました。
ボリシャールでの最後の夜、スタッフさんに別れを言う中で、現地の方々に沢山のことをしてもらったと実感しました。その恩は返しきれないほど大きいとも感じました。
私は、どんなに時間がかかっても、どんな形でもこの経験を生かすことが私たちの役目、義務であり、私たちをもてなしてくださった現地の方々への最大の恩返しだと思っています。

まだまだこの素晴らしい経験をまとめることができず、自分の無力さを感じていますが、
私たちが無事に過ごせるよう助けてくださった現地の方、楽しいときつらいときを共に過ごしてくれたみんな、そして素晴らしい機会を与え見守ってくださった神様に感謝してバングラデシュスタディツアーの感想とさせていただきます。

編集後記

編集をしたことで
バングラデシュのことを
思い出して楽しいし、
またバングラデシュに行き
たくなりました。でもそれと共に
自分がこれから考え、やるべきことも
改めて感じました。
そういう意味でも、編集委員
をやって良かったと思いました。
みなさん、ぜひ読んで下さいね。

－編集委員一同－

バングラデシュに寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。

ACEF 会員募集

個人会員	年額１口	~~5,000円~~ 7500円
団体会員	年額１口	50,000円
学生会員	年額１口	2,000円
一時寄付	随時	金額自由

郵便振替　00100-0-185540

特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金

〒162-0044　東京都新宿区喜久井町4-1　印刷会館4F
TEL. & FAX. 03-3208-1925
E-mail:acef@acef.or.jp
http://www.acef.or.jp
特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26
TEL&FAX 03-3208-1925